

第1回サイバスロンに向けて

First Cybathlon

内藤 昭三（京都情報大学院大学）

Shozo Naito (The Kyoto College of Graduate Studies for Informatics)

第1回サイバスロン (Cybathlon) が、2016年10月8日 (土) に、スイスのチューリッヒで開催される[1]。第31回オリンピック (2016年8月5-21日) [2]、および第14回パラリンピック (2016年9月7-18日) [3]の各ゲームのリオデジャネイロ開催に続くことになる。競技種目は、以下の6種が予定されている。

第1回サイバスロン競技種目(6種)

Brain-Computer Interface Race
 Functional Electrical Stimulation Bike Race
 Powered Arm Prosthetics Race
 Powered Leg Prosthetics Race
 Powered Exoskeleton Race
 Powered Wheelchair Race

オリンピックやパラリンピックは、フィジカルゲームの頂点である一方で、ドーピングとの戦いの歴史でもあった。実際、ハンマー投げの室伏選手は、2004年のアテネオリンピックにおいて、記録1位のハンガリー選手のドーピング疑惑により、陸上・投擲種目でアジア史上初の金メダルを獲得している。また、オリンピックとパラリンピックの境界も微妙である。陸上競技の華ともいえる100メートル走の男子オリンピック記録は、ボルトの9秒63 (2012年ロンドン) であり、一方パラリンピック記録は、ピーコックの10秒90 (2012年

ロンドン)、その差は1秒27と迫っている。健常者と障害者の境界も微妙であり、ピーコックと争ったピストリウスは、ロンドンオリンピックの400m走にも出場している。そこに、さらにサイバスロンが登場する。究極のドーピングともいえるサイバー(ロボット)スーツを装着したアスリートが、健常者の記録を更新することは十分に考えられる。

一方、メンタルゲームの世界でも、ヒトとコンピュータとの境界は微妙な状況となっている。チェスは、1997年にチャンピオンのカスパロフ (ヒト) が、ディープ・ブルー (コンピュータ (IBM)) に負けて以来、ヒト側はすでに分が悪い。将棋は、ここ数年、電王戦において拮抗した戦いが展開されてきた[4]。そして本年 (2015年) より、電王戦を主催してきた株式会社ドワンゴがスポンサーとなって、新たなヒトの棋戦「叡王戦」が開始された[5]。来春 (2016年) には、「第1期電王戦」が開催され、初代叡王 (ヒト) と「第3回将棋電王トーナメント」で優勝したソフト (サイバー) との二番勝負が行われる。ロボットを東大に入学させるというチャレンジングなプロジェクトも進められている[6]。

これからもサイバーとフィジカルは、ますます競合／融合していくことになるだろう。1973年に世界初の手で持てる携帯電話、モトローラ DynaTAC 8000Xの開発者のひとりクーパー氏は、電話機能は、やがて耳の後ろに埋め込まれることになるだろうと予測している[7]。ヒトは、義足や義手のみならず、CPUやメモリまでも (一部) 取り込んだ「組み込みシステム」化することになるかもしれない。これにより、脳機能障害や痴呆の改善に寄与することも期待される。ピストリウスは、その義足の形状より「ブレードランナー」の異名を持つが、1982年公開の映画「ブレードランナー」の続編が計画されていると聞く。ハリソン・フォードが再び主役というのも期待されるが、あのレイチェルがどうなっているのかは、おおいに気になる。アンドロイドたちは「電気羊の夢」を見ているのだろうか？

[1] <http://www.cybathlon.ethz.ch/>

[2] <http://www.olympic.org/rio-2016-summer-olympics>

[3] <http://www.paralympic.org/rio-2016>

[4] <http://www.shogi.or.jp/kisen/denou/>

[5] <http://www.shogi.or.jp/kisen/eiou/index.html>

[6] <http://21robot.org/>

[7] http://www.gizmodo.jp/2015/06/post_17455.html

◆著者紹介

内藤 昭三 Shozo Naito

京都情報大学院大学教授。

京都大学大学院工学研究科修了 (数理工学専攻), 工学修士。

元NTT研究員。